

## 地域社会における音楽活動の考察

—旭川市「ネージュ・コンセール(雪のコンサート)」の事例 その2—

### A Study of Musical Activities in Local Communities

—The Example of “Neige Concert(Snowy Concert)” in Asahikawa City—Part 2

鈴木 しおり

SUZUKI, Shiori

### 抄 録

『音楽の街』と呼ばれる北海道・旭川市において、1979年の冬から1996年にいたる18年間にわたり、雪の季節にこだわって開催された音楽会『ネージュ・コンセール(雪のコンサート)』の発足とその主旨、さらにシステム・運営方法(マネジメント)に関して分析する。当会は、冬の旭川市において、中央の優れた専門家(作曲家・ピアニスト・声楽家)と地域住民(音楽家・音楽愛好家・一般市民)が一体となり、一連の音楽会・レッスン・公開講座等を企画してきた。その音楽共同体の中からは海外コンクールで入賞する新人も誕生するなど、地域にとって音楽的なレベル向上に大きく貢献してきた。

閉鎖的になりがちな冬の北海道において、雪とともに開催を継続してきた当会の活動内容を「その2」では、18回の各公演をより詳細に分析することで、北方圏における音楽文化の有りかたを考察する。

#### 1. はじめに

現代の教育・学習では、人々が学校ばかりでなく地域において共に学び、共に楽しみ、相互に関わりあうことよって人間的に向上することが期待されている。社会の共同体の一員として、個性豊かな自身を必要としてくれる人々と心を通わせる“愛情のネットワーク”に支えられ、自己の学習の内容を深め、範囲を広げてゆくことが“生きる意欲”に繋がるとされているのである。そのことによって、子供・高齢者・障害者等の従来、社会的弱者、すなわち有能ではない人々とみなされていた人々が、実はそうではなく、それぞれの人が“最もその人らしくある”ための、自身の内的な満足度において有能さが測られようとしている。少子高齢社会を迎え、生産性第一主義の原理上につくられたこれまでのシステムが軋みはじめていよう。

今日、地域の教育力向上の施策基盤として、コミュニティ形成が重要視される中、人々は、“人と人とのかかわり合い”の糸口を、どこに求めるべきか探しあぐねているのではないだろ

うか。特に、北海道は一年間の半分以上を雪に閉ざされ、ただでさえ人々は閉鎖的になり、互いへの関心が薄くなりがちである。産・官・学一体となりあらゆる試みが成されようとしているが、すべての人々が共有できる“切り札”ともいえる施策は、簡単にはみつからない。

本論は、その“切り札”として“音楽によるコミュニケーション”を挙げる。北海道旭川市における市民音楽団体『ネージュ・コンセール（雪の音楽会）』の長年にわたる活動を分析することによって、人々の“生き生きとした生活”を支援する音楽人生への道筋（システム）を考察したい。

## 2. 研究の方法

ネージュ・コンセール(雪の音楽会)では、中央の優れた専門家（作曲家・ピアニスト・声楽家）と地域住民（音楽専門家・音楽愛好家・一般市民）が一体となり、一連の音楽会・レッスン・公開講座等を、1979年の冬から1996年にいたる18年間にわたり企画してきた。顧問である作曲家・(故)中田喜直氏が、「昔は非常に遠くて、非常に寒い所であった旭川は、今ではとても近く、とても暖かい親密な場所になった…」<sup>1)</sup>と述べたように、当音楽会は北海道の極寒の季節での開催であったにもかかわらず、温度や距離の数値では測れない“暖かく親密な何か”を人々の心に生んだのであった。その“何か”が魅力となって、18年間にわたり継続したのである。

本論では、旭川市以外の北海道の地域でも、北国の特色ある音楽団体が生まれることができるシステムを作り出せるよう、魅力となった“何か”を調査・分析することで、そこから普遍的な要因を見出したいと考え、「その1（生涯学習研究所研究紀要第5号）」では、ネージュ・コンセール（雪の音楽会）の発足と主旨、システム（構成員組織）、公演内容、企画運営（マネジメント）について調査・分析した。その結果、ネージュ・コンセール（雪の音楽会）の主旨は以下の3点に集約することができた。

### [ネージュ・コンセール（雪の音楽会）の3つの主旨]

- ① 地域で音楽を志す有能な人材を、中央の楽界へ送り出すための登竜門とする
- ② 地域の音楽家のレベル向上を目指し、指導者を養成する
- ③ 地域に根ざした音楽芸能・音楽芸術を創造する

また、ネージュ・コンセールは、次のような人員組織を形成、運営してきた（敬称略）。

顧問：(故)中田喜直（作曲家）、三浦洋一（ピアニスト）、中沢 桂（声楽家）  
 代表：武田敦夫（声楽家）  
 事務局：鈴木しおり（ピアニスト）  
 後援会長：(故)神戸章仁（医者）

更に、ネージュ・コンセール（雪の音楽会）の発足において、地域住民であると同時に指導的立場にある人員（地域の音楽専門家、地域の音楽指導者）の念願を、以下の3点にまとめた。

- ① 地域の音楽専門家と音楽指導者が、中央の3氏に指導を受けてレベル向上を目指し、質の高い活動（演奏等の学習発表）を披露する場を設定すること。
- ② 一般市民に対して、3氏の作品・演奏を紹介し、鑑賞学習の場を設定すること。
- ③ 地域の音楽愛好者が、3氏と共演することで芸術的な音楽体験をする場を設定すること。

本論「その1」に続く「その2」では、18回公演の活動内容をさらに詳細に述べ、活動の経緯をたどり、「その3」での考察へと繋げたい。

尚、本論では混乱を避けるため、「地域住民」の定義を以下の3点に分類している。

- ① 地域（旭川市）の音楽専門家（地域の音楽専門家・地域の音楽指導者）
- ② 地域（旭川市）の音楽愛好家（地域の音楽指導者・地域の音楽愛好家）
- ③ 地域（旭川市）の一般市民

### 3. 活動の内容

ネージュ・コンセール設立以来の18回に及ぶコンサート内容は、実験的な試みが多いため、その回ごとに考察してみる。

\* 1978年2月20日（月）……旭川市・市民文化会館小ホール

「中田喜直の歌曲とピアノ曲による——武田敦夫・鈴木しおりジョイントコンサート」

この会を皮切りに翌年からネージュ・コンセールは始まった。三浦洋一氏の伴奏で武田氏のバリトン独唱、著者のピアノ独奏、旭川女性合唱団のステージ、賛助出演に地元旭川市のソプラノとピアノ各1名を加えての、2重唱や2台ピアノの演奏形態で、中田喜直氏の歌曲(合唱曲を含む)とピアノ曲を、自身のお話や解説を交えながら進めるものであった。

主な曲目：「海四章（バリトン）」「変奏的練習曲（ピアノ）」「ピアノのための組曲『光と影』（ピアノ）」「早春賦、夏の思い出、ちいさい秋みつけた、雪の降る街を（女声合唱）」「木の匙（バリトン、ソプラノ）」「2台のピアノのための“軍艦マーチによるパラフレース”」

\* 1979年2月16日（金）……旭川市・公会堂

「中田喜直・三浦洋一両先生を囲む——第1回 ネージュ・コンセール」

第1回目のネージュ・コンセール。三浦氏は旭川フィルハーモニー管弦楽団とピアノ協奏曲、モーツァルトK.107を共演し、また、地元の音楽家によるソプラノ独唱やバリトン独唱を指導し、伴奏で共演した。その他、プログラムには、ピアノ独奏や市内の児童合唱団の演奏が組まれた。お話と解説は中田喜直氏。

主な曲目：「ピアノ・ソナタ（ピアノ）」「マチネ・ポエテックによる四つの歌曲から」「母私抄、ねむの花」「モーツァルト／ピアノ協奏曲K.107（ピアノ、室内オーケストラ）」

\* 1980年4月15日（火）……旭川市・市民文化会館小ホール

「三浦洋一先生を囲むジョイント・コンサート——第2回ネージュ・コンセール」

市内のソプラノ1名、メゾ・ソプラノ1名、ピアノ2名が三浦氏の指導を経て共演した。この会で初めて、三浦氏と市内のピアニストとの2台ピアノの共演がプログラムに組まれた。

主な曲目：「サルビア、桐の花、すずしきうなじ、またある時は、たんぽぽ、霧と話した（ソプラノ）」「愛を告げる雅歌（メゾ・ソプラノ）」「シャブリエ／狂詩曲“スペイン”・“3つのロマンティックなワルツ”・ミヨー／スカラムーシュ（2台ピアノ）」

\* 1981年2月21日（土）……旭川市・公会堂

「第3回ネージュ・コンセール “大中恩 歌曲と合唱の夕べ”」

「旭川の地には何度か来る機会を得ましたが、この度のように、大勢の皆さんに迎えられて、特に私の歌曲がステージにのせられることは、おそらく初めてのことでないかと思います<sup>2)</sup>と大中氏自身が語るように、市内の5つの市民合唱団（児童合唱、女声合唱2、混声合唱2）のほか、市内合唱愛好者も参加し、その他、重唱や独唱のステージも設けられていたため、出演者は延べ400名近くなった。また、ソプラノ2名、テノール1名、バリトン1名による大中氏の歌曲の演奏は旭川市において初演であった。ゲストとして中田喜直氏も飛び入り参加した。

主な曲目：「犬のおまわりさん、さっちゃん（重唱）」「秋の女、鳩笛（ソプラノ）」「夜想（テノール）」「かなしみについて（バリトン）」「子供の部屋・愛の風船（女声合唱）」「月と良寛（少年少女合唱）」「島よ（混声合唱）」

\* 1982年2月20日（土）……旭川市・市民文化会館小ホール

「第4回ネージュ・コンセール “ピアノ連弾の夕べ”」

市内のピアニスト4名のほか、小学2年生2名、小学3年生1名、中学生1名の計8名の出演者全員が三浦氏と2台ピアノを演奏した。このような企画の演奏会は三浦氏としても初めてのことで<sup>3)</sup>、1月30日・31日の2日間にわたって来旭し、出演者のレッスンを実施している。中田氏も特別にゲスト出演し、市内のピアニストと4手連弾組曲「日本の四季」を演奏したほか、三浦氏と「汽車は走るよ」等を連弾し、会場をなごやかで親密な雰囲気にした。

主な曲目：「クーラウ／ソナチネ1番、6番、ブルグミュラーより、クレメンティ／ソナタ変ロ長調（小・中学生によるピアノ）」「四手連弾のための組曲“日本の四季”（ピアノ）」「ベンジャミン／ジャマイカカプリソ（2台ピアノ）」

\* 1983年3月12日（土）……旭川市・公会堂

「ネージュ・コンセール・5周年記念演奏会 “中田喜直 歌曲と合唱の夕べ”」

お話とピアノ伴奏を中田喜直氏が、ピアノ伴奏を三浦洋一氏が、独唱と2重唱を中沢桂氏が担当し、市内の合唱団（小学校2、高校1、大学1、女声合唱団2、混声合唱団2とバリトンの武田氏が参加した。中田喜直氏夫人の中田幸子氏が旭川の女声合唱団の指導と指揮をした。中沢氏は初めての出演で、独唱では「六つの子供の歌」や「めだかの学校」等の一連の童謡を披露したほか、武田氏との2重唱「歌曲集・木の匙」を演奏した。総出演者数400名に及んだ。

主な曲目：“かわいいかくれんぼ”（少年少女重唱）、“えんぴつの歌”（少年少女重唱）、組曲「北の歌」より“夏の海”（女声合唱）、“夏の思い出”（混声合唱）、「六つの子供の歌」より（ソプラノ）、“つくだにの小魚”（バリトン）、歌曲集「木の匙」（ソプラノ・バリトン）、“めだかの学校”“おかあさん”（ソプラノ）

\* 1984年3月13日（火）……旭川市・市民文化会館小ホール

「第6回ネージュ・コンセール “オペラ” 独唱・重唱の夕べ」

中沢氏、三浦氏の両氏が地元の7名の演奏者と共演した。中沢氏は独唱の他、五郎部氏と武田氏との2重唱を2曲、メゾ・ソプラノの西川紀子氏を加えた4重唱1曲を披露し、市民の指導、共演にも三浦氏と同様、中心的な存在で積極的に取り組んだ。

主な曲目：「歌劇『リゴレット』より“ほおの涙か”（テノール）」「歌劇『ジャンニスッキ』より“いとしのお父様”（ソプラノ）」「歌劇『椿姫』より“乾杯の歌”（二重唱）」「歌劇『リゴレット』より“第3幕の四重唱”（四重唱）」

- \* 1985年3月14日（木）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第7回ネージュ・コンセール “2台ピアノの夕べ”」

地元の9名のピアニストが三浦洋一氏に1983年から2台ピアノの指導を受けていたが、その成果を発表した。その指導方法は、曲目を三浦氏が15曲程度の課題曲として提出し、その中から自主的に選ぶものである。パートナーも互いに自由に選びあうため、一同が集まる選曲の際は、大変楽しいものであった。1部が地元のピアニスト同志の演奏、2部が三浦氏と地元ピアニストとの演奏で、全ステージを通して三浦氏の理解しやすい曲目解説がつく。この会の出演者から、旭川ピアノ演奏研究会が1987年に発足することになった。

主な曲目：ラフマニノフ／組曲第1番『幻想曲』、組曲第2番より“タランテラ”、プーランク／ソナタ、エレジー、サン・サーンス／ベートーベンの主題による変奏曲、他

- \* 1986年3月15日（土）……旭川市・公会堂  
「第8回ネージュ・コンセール “オペラ” 独唱・重唱の夕べ」

一昨年の「“オペラ” 独唱・重唱の夕べ」に引き続くPart IIとしてのコンサート。地元の出演者は多少入れかわるが、内容・形式ともに一昨年と同じ。

主な曲目：「歌劇『トゥーランドット』より“氷のような姫君の心も”(ソプラノ)」「歌劇『魔弾の射手』より“姿凛々しい若者は来る”(ソプラノ)」「歌劇『ラ・ボエーム』より抜粋で四重唱」他

- \* 1987年2月3日（火）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第9回ネージュ・コンセール “ピアノ・デュオの夕べ”」

一昨年の“2台ピアノの夕べ”に続くPart IIとしてのコンサート。更に3名の地元のピアニストが加わり、計12名の出演者となる。旭川ピアノ演奏研究会では、このころから最初のグループ（8名）の他、更に若い層のメンバーが加わり、2番目のグループが結成されようとしていた。

主な曲目：モーツァルト／ソナタK.448、ルトスワフスキ／パガニーニ変奏曲、ガーシュイン／ラプソディ・イン・ブルー、シャブリエ／ロマンティック・ワルツ第2番、プーランク／エレジー・カプリツ、他

- \* 1987年3月23日（月）……旭川市・ホテル東急イン（平安の間）  
「ネージュ・コンセール10周年記念特別演奏会——“中沢桂・栗林義信と共に歌う”」

栗林義信氏を新たに客演として迎えた。1部は、市内の声楽家8名が、中沢 桂・栗林義信の両氏とともに歌うステージで（2重唱、4重唱）、2部は、中沢氏と栗林氏の独唱と2重唱のステージ。内容は中田作品をはじめとする日本歌曲やオペラ・アリアで、特にジャンルを定めてはいなかった。10周年記念ということで、ディナー・ショーとして開催し、観客は限定されたが、贅沢なコンサートとして大変好評であった。全ステージを三浦氏が伴奏し、中田喜直氏も「お話」で参加された。

主な曲目：流浪の民（四重唱）、この道・二十三夜・悲しくなった時は・サルビア・「歌劇『トスカ』より“歌に生き、愛に生き”」（中沢）、木兎・ラルゴ・「歌劇『椿姫』より“プロバンスの海と陸へ”」（栗林）、「歌劇『メリーウイドウ』より“お手をどうぞ”」（二重唱、中沢・栗林）」他

- \* 1988年3月18日（金）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第11回ネージュ・コンセール“ピアノ・デュオの夕べ”」

2台ピアノによるPart IIIとしてのコンサート。6名の地元のピアニストが新たに出演した。演奏者の8名は、旭川ピアノ演奏研究会の第2番目に結成されたグループである。

主な曲目：シューマン／アンダンテと変奏、グラナドス／「ゴイエスカス」より“マハとナイチンゲール”、アルベニス／「イベリア」より“トゥリアーナ”、サン・サーンス／ベートーベンの主題による変奏曲、他

- \* 1989年3月13日（月）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第12回ネージュ・コンセール“ピアノ・デュオの夕べ”」

プログラムは、スペイン・フランスのラテン系の曲で、この回から三浦氏が全ステージを地元ピアニストと共演することになった。同年2月に、「ピアノ伴奏法について」と題したネージュ・コンセール主催の三浦氏の第1回目の公開講座が開かれた。

主な曲目：ラヴェル／ラ・ヴァルス、「ゴイエスカス」より“マハとナイチンゲール”、アルベニス／「イベリア」より“トゥリアーナ”、シャブリエ／3つのロマンティック・ワルツ、他

- \* 1989年3月20日（月）……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第13回ネージュ・コンセール“オペラ”独唱・重唱の夕べ」

1986年に発足した旭川オペラ研究会のメンバー14名との共演。少しでもオペラの楽しさを知ってもらおうと、喜歌劇「こうもり」では、小規模な舞台装置と衣装、振り付けを試みる。中沢氏が演技指導も担当し、コンサートでは主役のアデーレ役を歌い、模範演技を披露した。氏の洗練された演技や動作につられて、地元の歌手達も照れることなく、思い切った演技ができたことが印象的であった。また演奏内容もソロ、アンサンブル、合唱…とバラエティに富み、水準も高く、小規模ではあるがオペラの醍醐味と楽しさが観客に伝わる印象的な舞台となった。

主な曲目：「歌劇『セヴィリアの理髪師』より“今の歌声は”(ソプラノ)」「歌劇『魔笛』より“誰か誰か助けてよ”“やがて夜があければ”(四重唱)」「喜歌劇『こうもり』より“しみじみ泣けるの”(三重唱)」、他

- \* 1990年3月6日(火) ……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第14回ネージュ・コンセール “ピアノ・デュオの夕べ”」

旭川ピアノ演奏研究会のメンバー7人による三浦氏との共演で、Part V。プログラム前半はドイツ、ロシアの作品。後半は、ピアノ・デュオの歴史をたどる内容で古典(クレメンティ)から現代(ルトスワフスキ)までの曲目を取り上げた。三浦氏は、例年1月に1週間程来旭され、出演者達を指導する。また2月に公開講座がある場合も指導し、公演前も3日程前日に来旭され、最後の指導を施した。三浦氏の熱心な指導のおかげで、演奏者は単なる演奏技術ばかりでなく、作曲者が意図した曲の解釈を含めた幅広く奥の深いピアノ芸術の探究が可能となり、高い演奏レベルを得ることができた。

主な曲目：ブラームス/ハイドンの主題による変奏曲、クレメンティ/ソナタ変口長調、ショパン/ロンド作品73、サン・サーンス/アラブ風奇想曲、ルトスワフスキ/パガニーニ変奏曲、他

- \* 1991年3月5日(火) ……旭川市・市民文化会館小ホール  
「第15回ネージュ・コンセール “ピアノ・デュオの夕べ”」

旭川ピアノ演奏研究会のメンバー6人による三浦氏との共演で、Part VI。ロシア作曲家の作曲による夕べ。2月17日には、ベートーヴェンのソナタを教材に「楽譜からいかに音楽を読みとるか」と題した公開講座Part IIが開かれた。

主な曲目：アレンスキー/組曲 作品15、ラフマニノフ/組曲第2番“舟歌”“夜と愛”“涙”“復活祭”、チャイコフスキー/バレエ組曲「くるみ割り人形」より“小序曲”“特徴のある踊り”“花のワルツ”、ストラビンスキー/バレエ組曲「ペトルーシュカ」より“謝肉祭、ロシアダンス”“ペトルーシュカの小屋”



\* 1991年5月23日（木）……旭川市・公会堂

「第16回ネージュ・コンセール・歌劇“フィガロの結婚”ハイライトの夕べ」

旭川市民オペラ研究会のメンバー13名によるPart IV。1991年は、モーツァルト没後200年の年であったため、3大オペラの1つであり彼の最高傑作「フィガロの結婚」を、ハイライト形式で取り上げた。この試みはネージュ・コンセールとしては初めてのことであった。1つのオペラの抜粋を、物語として短くまとめあげていくというのは、編集の力量の間われる難しい作業である。その面倒な部分を三浦氏・中沢氏の両氏にお願ひし、また、当日は演奏や解説まで担当していただき大変な負担をかけた。公演準備は5月21・22日の2日間にわたり、出演者全員のレッスンを両氏に実施していただいた。

主な曲目：“もう飛ぶまいぞ、この蝶々”(バリトン)、“恋の悩みを知る君は”(メゾ・ソプラノ)、“さあ、どうぞ”(手紙のソプラノ二重唱)、“フィナーレ”(重唱)

\* 1993年9月18日（土）……旭川市・大雪クリスタルホール音楽堂

「第18回ネージュ・コンセール・中沢 桂“心の調べ”」

回数思い違いで第17回目が抜けてしまう。1991年9月に、大雪クリスタルホール音楽堂の建設開館記念事業の催し物の1つとして開催されたため、ネージュ・コンセールとしては初めて秋の開催となった。新しい音楽ホールの誕生にちなんで、ネージュ・コンセールも初心に立ち返ろうと企画されたため、中沢 桂“心の調べ”と題し、1978年の「中田喜直の歌曲とピアノ曲による——武田敦夫・鈴木しおりジョイントコンサート」の出演者で構成した。当会の生みの親でもある三浦氏が伴奏、市内の女声合唱団2つと武田氏と著者が出演し、中田喜直氏の代わりに中沢氏が参加する形となった。

当夜は、ネージュ・コンセール15年間の積み重ねを結集したプログラム内容といえるもので、歌曲、オペラの独唱曲、重唱曲、2台ピアノ曲、中田喜直氏の合唱曲、また、最後は“中沢 桂 心の調べ”のステージを特別に設け、プリマドンナとしての長年の歩みをほうふつさせる日本歌曲、日本のオペラ（“夕鶴”）やイタリアオペラ（“ラ・ボエーム” “トスカ”）の Aria 等を聴かせ、まさに聴衆を魅了した。その様子を旭川大学教授・山内亮史氏は「過ぎ行く至福の時を惜しめ——大雪クリスタルホール音楽堂とネージュ・コンセール」と題して、『旭川音楽春秋』第25号に掲載して<sup>4)</sup>。

主な曲目：「中田喜直作品集」より“霧と話した”“ぶらんこ”“石臼の歌”(女声合唱)、「木の匙」より（ソプラノ・バリトン），“待ちぼうけ”“城ヶ島の雨”(バリトン)、「ゴイエスカス」より“マハとナイチンゲール”・アルベニス／「イベリア」より“トゥリアーナ”・ファリャ／火祭りの踊り（2台ピアノ）、歌劇「夕鶴」より“さようなら”、他

\*1996年6月30日（日）……旭川市・大雪クリスタルホール音楽堂

平成8年度旭川市大雪クリスタルホール第3回自主文化事業「ネージュ・コンセール オペラ劇場『中沢 桂 “夕鶴の世界”』(第19回)

旭川市教育委員会から委嘱され、大雪クリスタルホール（1993年建設）の自主文化事業としてネージュ・コンセールとして著者が初めて企画・製作したホールオペラ。東京の専門家（“つう”中沢 桂、“与ひょう”川上洋司）と地域住民との合作による木下順二作、團伊玖磨作曲の「夕鶴」公演。音楽・演技指導を中沢 桂氏に依頼し、大雪クリスタルホールの初のオペラとしてオーケストラ伴奏をピアノ伴奏（堀場夏恵）で行ったことも画期的であった。「夕鶴」は、「修善寺物語」の楓、「大仏開眼」の葛城郎女等、中沢 桂がそのタイトルロールを演じた日本の創作オペラのひとつである。村人（石田久大、武田敦夫）、村の子供たち（向陵小学校合唱団、西御料地小学校）のほか制作協力として合唱指導、照明、衣装・メイク等、多くの旭川市民がかかわり、また、オペラでありながら大人3000円、高校生以下2000円の低入場料金に設定し、文化振興に配慮したため600席が満席となるなど、地域の文化活動としての大きな一歩を残した。



写真1. 『中沢 桂 “夕鶴の世界”』 チラシ・ポスター

#### 4. 活動の経緯

以上のように、1978年の発足以来、ネージュ・コンセールは、中央の優れた専門家の指導・支援を得て、旭川市民が主体となったコンサートを開催し、継続してきた。ここで、ネージュ・コンセールの活動内容の経緯をまとめてみる。

##### 1) 1978～1983年（発足～第5回）——設立時の創造的・実験的な音楽活動

1978～1983年の第1～5回までのネージュ・コンセールは、一般市民を巻き込んだ創造的・実験的な音楽活動を展開した。会発足のきっかけとなった中田喜直氏の作品を中心とし、また、ピアニスト三浦洋一氏の独奏・伴奏・指導等による市民合唱団や地元の市民演奏家の活動である。以下に、年ごとの特徴を挙げてみる。

- ・1978年(発足)——武田氏と著者との中田作品によるジョイント・コンサート
- ・1979年No.1 ——旭川フィルハーモニー管弦楽団とピアノ協奏曲とその他の公演
- ・1980年No.2 ——地元の演奏家4人によるジョイント・コンサート
- ・1981年No.3 ——大中 恩作品による歌曲と合唱曲の公演
- ・1982年No.4 ——市内の小・中学生と地元のピアニストの2台ピアノの公演

・1983年No.5 ——ソプラノ歌手の中沢 桂氏を迎えての地元の演奏家と合唱団との共演  
これらの音楽会は、中央の専門家と市民との共演で、市民にとってまさに“極楽”とも言える楽しい音楽生涯学習であった。このような活動を展開するネージュ・コンセールは、全国でも珍しい事例であったと思う。

## 2) 1984～1993年 (第6～16回)

### ——オペラ“独唱と重唱の夕べ”と“ピアノ・デュオの夕べ”

1984～1993年の第6～16回までのネージュ・コンセールは、三浦氏・中沢氏の両氏が、地元の音楽家を指導し、「オペラ 独唱と重唱の夕べ」と「ピアノ・デュオの夕べ」で共演し、集中的に同種の音楽会の回数を重ねた時代である。

オペラ“独唱と重唱の夕べ”の公演は、5回(第6回1984年、第8回86年、第10回87年、第13回89年、第16回91年)を数え、“ピアノ・デュオの夕べ”の公演は、6回(第7回85年、第9回87年、第11回88年、第12回89年、第14回90年、第15回91年)を数えた。

この間、公演の出演者によって1986年に旭川市民オペラ研究会が発足し、1987年に旭川ピアノ演奏研究会が発足した。それ以後もこの2団体のメンバーが指導を受け、出演することになった。ネージュ・コンセールの出演者はもとより、三浦氏の評価の定まったピアノ伴奏に支えられ、また、ピアノ・デュオの指導を受けていたが、第5回目(1983年)から中沢氏を迎えることになり、一層充実した指導を受けることができるようになったのである。

また、1989年から、三浦氏による公開講座が開催され、現在、Part IIIまで進んでいる(1989年「ピアノ伴奏法について」、1991年「ベートーヴェンのソナタ“楽譜からいかに音楽を読みとるか”」、1992年「ショパンをどう読むか“どんな版を使用するか”」)。

特に、旭川ピアノ演奏研究会では、アンサンブル(2台ピアノ)が何より音楽の勉強になり、パートナー同志の親交を深める上でも意義があり、また、舞台での研鑽発表の場がなかったこともあり、そのすべての意味で、ネージュ・コンセールの存在は大きかった。

## 3) 1994年～(第18回～) ——現在のネージュ・コンセール

ネージュ・コンセールを母体として生まれた旭川市民オペラ研究会と旭川ピアノ演奏研究会は、それぞれ前者は中沢 桂氏、後者は三浦洋一氏が顧問となり、特に、旭川市民オペラ研究会は、現在ネージュ・コンセールとは道を異にする独自の活動を展開している。

1993年の第18回ネージュ・コンセールは、約80億円を投じて建設された旭川市・大雪クリスタルホール音楽堂のオープンに伴い、市民音楽活動においても新たな展開を模索する必要があると考え、一端、1978年の初心に返った。

現在、ネージュ・コンセール(雪の音楽会)は、メンバーの移動(事務局・鈴木が2000年より北海道浅井学園大学に専任として勤務)や、旭川市が経済的な不況に遭遇していることもあり、1996年のオペラ劇場から休会状態を維持している。しかし、その間に、故中田喜直氏の旭川市における音楽的功績をたたえる2001年2月「旭川市・プレ“雪の降る街を音楽祭”5」が開催され、2002年冬からは本格的に当音楽祭が第3回まで、旭川市の冬の行事として「雪まつ

り」とともに順調に回を重ねている。音楽祭には、三浦氏、中沢氏の音楽会も用意されており、3者の長年にわたる芸術的な絆が思い起こされる。

21世紀におけるネージュ・コンセール（雪の音楽会）は、更に、多様な音楽教育活動を、これまで以上に幅広く市民に提供していきたいと考えている。世界が大きく変わろうとしている現在、音楽のあり方もまた、変貌を逃げるはずである。学校教育・社会教育・音楽療法の立場から広く音楽の役割をとらえ、その活用方法を研究実践したいと考えている。

中沢氏と三浦氏は旭川市において、これまでも無償の学校公演<sup>5)</sup>やリサイタル、あるいは近隣町村での公演も多い。ネージュ・コンセールは、中田氏・三浦氏・中沢氏の三氏の優れた音楽的な種を発芽させ、大きく育てていきたいと考えている。

三氏の貢献の数々を柱に、今後も、市民音楽家が研鑽・発表する場を設けるなどの地域の指導者の育成に力をいれ、一般市民には多様な「極楽音楽生涯学習」の場を提供していきたいと考える。続く「その3」では、ネージュ・コンセール（雪の音楽会）の今後の展望として、これまでの活動の、更なる考察を教育論や振興法などの視点を交えて述べる。

## 参考文献

- 1) 鈴木しおり著『地方都市の音楽文化振興の研究——旭川市における生涯学習の視点から捉えた市民の音楽活動——』1997年5月、中西出版

## 引用文献

- 1) 作曲家・中田喜直（1923～2000）：旭川市において、昭和45年から没年の平成12年（1970年～2000年）までの30年間にわたる音楽的功績を称えるために『雪の降る街を音楽祭』が設立された。この音楽祭は、旭川ミュージックアクト2002の企画の一環として、“厳しい冬を克服し、美しい音楽を全国に発信しよう”と位置付けられ、“あー、雪の匂い”を旭川市のキャッチフレーズとし、全国へ向けて、“雪”のイメージを発信することになった。
- 2) 大中 恩「プログラム・ご挨拶」(第3回ネージュ・コンセール“大中 恩 歌曲と合唱の夕べ”1981年2月)
- 3) 武田敦夫「プログラム・ご挨拶」(第4回ネージュ・コンセール“ピアノ連弾の夕べ”1982年2月)
- 4) 山内亮史（旭川大学教授、社会・教育学）  
「過ぎゆく至福の時を惜しめ——大雪クリスタルホール音楽堂とネージュ・コンセール」  
（『旭川音楽春秋』第25号、1994年1月31日、34～37頁）
- 5) 旭川市立日新小学校、同北光小学校、同知新小学校、稚寒小学校、他